

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 28 年 6 月 3 日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2011～2015

課題番号：23360263

研究課題名(和文) 地域生活記憶集積メカニズムの解明とアーカイブ施設の社会実験及びその運営手法の構築

研究課題名(英文) A Social Experiment of Archiving Facility and Building Methodology of Management of it Using the Unraveled Mechanism of Accumulating Memories in Local Daily Lives

研究代表者

大月 敏雄(Otsuki, Toshio)

東京大学・工学(系)研究科(研究院)・教授

研究者番号：80282953

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 14,400,000円

研究成果の概要(和文)：戦後日本で多く建設されてきた計画住宅地における生活記憶の蓄積のメカニズムを、個人レベルから地域集団レベルまで分析した。UR赤羽台団地を中心としながら、高蔵寺ニュータウンなどを比較対象とした調査を実施したところ、個人レベルでの生活記憶の蓄積と、集団レベルでの生活記憶の蓄積の仕方が、異なる方法で行われつつあることが分かった。個人レベルだと個人的記憶や個人で残している書類や写真などを媒介にして記憶が蓄積される一方で、集団レベルでは、お祭りや行事などが集団の記憶の蓄積と世代を超えた再生に寄与していることが分かった。この点を踏まえて、計画住宅地のアーカイブ計画をする必要があることを明らかにした。

研究成果の概要(英文)：In this research project, we analysed the mechanism of accumulation of daily life memories in planned housing estates which have been built a lot in the after-war time in Japan. We mainly focused on UR Akabanedai Housing Estate comparing with Kozoji New Town and others, and found that the way of the accumulation of daily lives is different between personal level and group level. At the personal level, memories of daily lives are accumulated in the person's mind and some documents and photographs which are owned personally, but at the group level, group daily lives memories can be accumulated on such media as festivals and some kind of continual group activities. And this group accumulation of memories can be repeated over generations when the activities are continued. We revealed that local archiving facilities should be designed according to this found facts.

研究分野：建築計画

キーワード：記憶 生活空間 社会実験 団地 ハウジング 中間集団 建築計画 アーカイブ

### 1. 研究開始当初の背景

現在日本では戦後次々に開発された新規計画住宅地群が、今まさに、代替わりの時期を迎えているが、この現象は地域の超高齢化と、地域における空地・空き家の大量発生という差し迫った課題群の集積地という、解りやすい図式で捉えられがちである。しかし、こうした戦後計画住宅地の超高齢化現象は、長期的にみた場合、住宅地が経なければならぬ成熟化のための一段階に過ぎないともいえる。計画住宅地居住第一世代が、第二、第三世代に地域の居住環境をバトンタッチし、かつては画一的だと批判された地域を、固有の魅力あふれるアイデンティティの確立した故郷としていかに成熟させていくことが、今後のストック時代の住宅地計画の重要な課題の一つであると認識している。

こうした計画住宅地の成熟化のためにはもちろん、当面の超高齢化を乗り切るための各種地域ケアサービスやその拠点の導入、若年世代の住宅地への計画的誘導、適宜・適量のストック更新といった比較的物理的環境整備に近い諸方策が実施されなければならないが、計画住宅地が成熟した住宅地として持続的に幾世代もの居住者の故郷となり得るためには、固有の魅力あふれるアイデンティティの形成と確立が不可欠となるだろう。

しかるに欧米、特にアメリカの近代の計画住宅地では、同国の歴史に対する憧憬も手伝ってか、住宅地内に、その住宅地の形成過程、居住過程の記録をもとに、アーカイブ施設として運営しているところが多い(レヴィットタウンなど)。一方で、世界で初めての団地経営として名高いドイツのフッガイ(16世紀に建設)でも、住居の一部をアーカイブ施設として運営しており、実際に居住を継続している住宅地で、アーカイブ施設を居住の途中のある段階から導入・経営しているところは多数存在する。

これに対して、日本では、すでになくなった住宅地の再現(UR 集合住宅歴史館では同潤会アパートや公団住宅、住まいのミュージアム・大阪くらしの今昔館では公営住宅)を試みている施設がいくつかは存在するものの、実際に住まれて続けている住宅地において、その住宅地のアイデンティティ確立のために居住の過程で、アーカイブ施設等の運営を行っているところは、残念ながら存在しない。数十年にわたって、個人レベルで、あるいは共同体レベルで営々と築かれてきた生活環境そのものの記憶は、今のところ、個人レベルで蓄積され、いつの間にか地域に忘れ去られるのがほとんどと言ってよいだろう。ごく稀に、地域の近現代史に関わる公的博物館活動の対象となることもあるが、それはレアケースだといってよい。

こうしたことから、今後の日本の計画住宅地の成熟プロセスを重視した時に、地域の生活記憶の集積過程のメカニズムの解明と、地域のアイデンティティ確立のための生活記

憶の地域共同蓄積のための活動と装置(アーカイブ活動とその施設)の計画・運営手法の確立が必要である。

### 2. 研究の目的

日本で戦後数多く建設されてきた計画住宅地における生活記憶の蓄積のされ方を、個人レベルから地域集団レベルまでの幅広いレンジにおける一つのメカニズムとして解明することを通して、これらの計画住宅地がアイデンティティを確立した地域として成熟していくための、あるべき生活記憶の集積のさせ方をモデル的に構築することを目的としている。

このため、本研究では、旧住宅公団赤羽台団地という高度経済成長時代の象徴的な大規模都市型団地を対象とし、同団地およびその周辺地区における生活記憶集積メカニズムの解明を試み、その結果を踏まえ、同団地内で社会実験としてのアーカイブ施設を運用し、その生成・運用手法をモデル的に構築することを目指している。

また、このために国内外における計画住宅地のアーカイブ活動の調査も行う。

### 3. 研究の方法

本研究では、戦後日本の計画住宅地の典型例ともいえる、昭和 37 年に供給された旧住宅公団赤羽台団地(UR 賃貸住宅、東京都北区)と名古屋都市圏に昭和 40 年前後から開発が進んだ高蔵寺ニュータウン(春日井市)を主たる研究対象として、当該地域における生活記憶の集積のメカニズムを解明するとともに、赤羽台団地内の空き店舗を利用した仮設の実験的アーカイブ施設を社会実験的に運営することを通して、計画住宅地における生活記憶の共同的蓄積の手法をモデル的に構築するために、以下のような方法で研究を実施した。

赤羽台団地は昭和 30 年代の賃貸住宅として全面建て替え事業が進んでおり、現在では約半分程度において建て替えが完成しており、あと 10 年ほどで建て替えが完了する予定である。本研究では、科学研究費による女性に先立ち、その 1 年半前から、この団地内の空き店舗を拠点としながら漸進的に成長していく仮設アーカイブ施設の整備を行ってきた。具体的には、古い団地に住む居住者が建替えられた新しい団地に引っ越す際に処分される、さまざまな地域生活記憶の媒体(写真、自治会関係書類、地域資料、家具・什器など)を居住者から譲り受け、あるいは、撮影・複写して、現物資料として記録に残し、分析・展示するという一種の博物館活動を通してアーカイブ活動を展開することを軸に、建て替え事業の進捗によって時期ごとに変わっていくアーカイブ施設における研究活動の変遷を通して、様々なタイプの空間におけるアーカイブ施設運営のためのデータを蓄積した。一方で、この活動の一環として、

一種の参与観察として、居住者・居住者組織へのインタビュー等を実施してきた。

また、この活動を通して、「建替えによって超高齢化した団地居住者たちが地域のことや昔のことを語り合う、一種の高齢者の場所の創出」さらに「建替えによって新たに越してきた新住民と旧住民が地域生活のことを学び合い、語り合う、新旧コミュニティ交流の場の創出」そして、「赤羽台団地内だけではなく、広く赤羽地域に暮らす人々が、地域のアイデンティティを認識する場、つまり、団地内外の交流拠点の創出」という、「3つの場の創出」という社会的効果を検証することも、本研究の重要な役割であると考えている。

なお、本研究を進めるにあたり、当該分野の国外の先進事例における、記憶集積手法とその運用法に関する調査研究を行い、一方で、国内で同様の目的で活動を行っている諸団体に関する調査研究を行った。そして、こうした研究プロセスを経ながら、国内で同様の目的で活動している諸団体との国内シンポジウムを実施し、赤羽台で実験的に行ったアーカイブ活動の中間成果を取りまとめた。さらに、最終年度には、赤羽台団地建替え後に向けてのアーカイブ施設（例えば、現在のスターハウスを保存・活用しての設計提案など）の運営計画提案を行うとともに、それまで関わってきた国内外の、当該分野の研究者、実践者たちのネットワークを作るべく、国際シンポジウムを開き、その記録を出版物等として広く社会に投げかけることにより、赤羽台団地における常設アーカイブ施設設計画への社会への投企、そしてより一般的な形での地域生活記憶蓄積メカニズムの解明と、それをもとにしたアーカイブ施設のモデル構築手法を提示した。

具体的に、各年度の調査研究内容をまとめると、以下ようになる。

・1年目（2011年度）：赤羽台アーカイブ組織構成+国内外調査+記憶集積メカニズム分析

・2年目（2012年度）：赤羽台アーカイブ社会実験実施+国内外調査+記憶集積メカニズム分析

・3年目（2013年度）：赤羽台アーカイブ社会実験実施+国内外調査+国内外ネットワークづくり

・4年目（2014年度）：赤羽台アーカイブ社会実験評価+社会実験検証

・5年目（2015年度）：赤羽台アーカイブ社会実験完了：国際シンポジウム

#### 4. 研究成果

##### 4.1. 1年目及び2年目の成果

初年度から3か年にかけては、赤羽台団地におけるアーカイブ施設の社会実験的運用と並んで、国内外の動揺施設の事例調査を通して、生活記憶の集積メカニズムの分析を行った。

赤羽台団地におけるアーカイブ施設の社

会実験的運用においては、東京大学と日本女子大学の大学院生を中心とした、運営組織として「赤羽台プラス」を組織し、赤羽台プラスを中心に、赤羽台自治会やURの協力のもと、研究を実施した。

2011年度からURから借用している空き店舗2戸を利用し、そこを適宜改装しながら、再開発による引っ越し前まで、生活用品として使用されていた品々を中心に物品展示を行ったが、2012年からは、同アーカイブにおいてカフェ機能を併設し、団地内外の地域の居場所づくりという、新たなアーカイブ施設の機能展開の可能性を追求した。その結果、常連とも呼べる、新たな団地内人間関係の構築にも寄与することが分かった。団地の客観的歴史と、運営の主体となっている学生の駐在という二つの要素が、新たな場の構築に寄与するという結果が得られた。

また一方で、団地自治会と共同でアンケートならびにインタビュー調査を行い、高齢化が進む同団地における支えあいの可能性と団地の記憶継承の可能性についての分析を行った。その結果、団地内にはさまざまな支えあいの契機となる人間集団（中間集団）が形成されており、それらが自治会のようなフォーマルな組織から、複数人という小集団まで様々なタイプがあることが判明し、そのうちの一つとしてアーカイブ施設を取り巻く人間関係も挙げられることが分かった。こうした、身近な歴史を取り扱う場をオープンにしておくことの、地域社会としての可能性を確認できた。

さらに、上記のような活動の成果を、2012年度末に、北区飛鳥山博物館と共同で発表することができ、地元のCATV等でとりあげられた。

一方で、従来から継続的に行っている、国内外の居住地におけるアーカイブ施設の事例調査も引き続き行っている。特に、ドイツ、ハンブルグにおける戦時中から継承される団地に関するアーカイビング活動が、オーラルヒストリーの記録保存とともに多様に展開しているという先進的事例を発見することができた。

##### 4.2. 3年目の成果

2013年度においても引き続き、国内外における地域生活空間における記憶集積に関する事例調査を行った。具体的には、海外では台湾、ミャンマー、イギリス、ドイツにおける調査を行ったが、イギリスとドイツでは関連文献並びにDVDの翻訳を行った。またイギリスでは、近代初期のハウジングの黎明期における建物保存やそのアーカイブ施設に関する実態調査を行うことができた。

国内では、引き続き、赤羽台団地における社会実験として、大学院生主体の組織である「赤羽台プラス」を中心に、生活記憶を契機としたコミュニティ形成のための定期的実験イベントを開催した。この一連の社会実験の初期には、URから貸借した空き家となった

店舗を具体のアーカイブ施設として実験的運用を行ったが、今年度から団地建て替え事業に伴って同施設が解体となったため、地元自治会やURの協力のもと、常設展ではない形での社会実験の展開を行いつつある。ここでわかったのは、常設の空間がなくとも、生活記憶の集積過程としての中間集団を巻き込んだイベントによって、複数の関心事を持つ社会層が出会う場を創造できる可能性があるという発見である。

また、高蔵寺ニュータウンにおいて発行されてきたタウン誌の記録保存とその分析も、進みつつあり、また一方で、赤羽台団地を中心に行ってきた、社会実験のノウハウを、次年度に千葉の海浜のニュータウンや横浜の洋光台団地などに適用する可能性も出てきた。

こうした一連の社会実験的活動の中間とりまとめとして、11月には京都において、公開研究会「地域生活記憶集積メカニズムの解明と社会実験及びその運営手法の構築」を実施した。

#### 4.3. 4年目の成果

##### <実績概要>

アーカイブ施設調査については、国内においては特に、昨今産業遺産として注目されつつある、日本の産炭施設の遺構をめぐる記憶保存の諸活動に関する調査を行い、なかんずく、生活の場であった炭鉱住宅街における生活記憶の集積状況について全国的な把握を行った。

さらに、一連の本研究の中間的とりまとめとして、日本民俗学会との協力のもと「2014国際シンポジウム「当たり前」を問う！日中韓・高層集合住宅の暮らし方とその生活世界」(2014年10月4日(土)、於：成城大学)を実施し、「当たり前」の把握の仕方、既述の仕方、記憶の仕方について、多方面からの考察を深めることができた。

一方で、赤羽台団地における生活空間の記憶装置に関わる社会実験の継続として、学生主体の団体である赤羽台プラスの活動を中心にして、団地内の共用空間を利用した、アドホックな形での居住者共同の記憶づくりに関するワークショップを実施し、固定的なアーカイビング施設ではない形での記憶集積に関わる実験的研究を行うことができた。さらに、これら一連の社会実験的な取り組みの発展形として、千葉市の海浜部における団地の生活記憶集積装置の試験的運用を行った。

#### 4.4. 最終年の成果

当該研究の一連の最後の年であるので、赤羽台団地におけるアーカイブ施設運営は、テンポラリーな場所の設営をもとにした、記憶を媒介とした異世代交流の社会実験を行った。具体的には、赤羽台団地を舞台とした古い映画の上映会を、新旧居住者と交えて行うことにより、こうした異世代が同時に記憶を

追体験できる活動の評価を試みた。

さらに、日本建築学会、日本民俗学会においては、本研究課題に即した雑誌論文の刊行を行い、これまで本研究によって明らかになった諸事実を中心に、学术界にフィードバックしている。

また、当初から予定していた、本研究成果を国際的に問うための国際シンポジウム「ニュータウンにおける記憶の蓄積」を2016年1月に開催し、「ニュータウンにおける記憶の蓄積」大月敏雄(東京大学)、「パリと東京のニュータウンのパラダイムの比較」セシル・浅沼=プリス(フランス国立科学研究センター北アジア地域事務所・副所長)、「中国と日本の原風景の違い」周静敏(同済大学建築都市計画学院・教授)、「千里ニュータウンでの記憶の蓄積」鈴木毅(近畿大学建築学部・教授)、「赤羽台団地における記憶蓄積の社会実験」赤羽台プラス(東京大学+日本女子大)の報告を受け、本科研メンバーがそれぞれ、これまでの研究で蓄積した観点から、コメントを行った。

#### 4.5. まとめ

このように本研究においては、国内外の集合住宅団地を中心とした生活記憶蓄積装置としての様々なアーカイブ施設の調査をもとに、様々なメディアによるアーカイブの可能性を確認し、実際にドイツの団地における生活記憶の蓄積活動のDVD翻訳を行い、こうした成果の一つとして、赤羽台団地のお祭りを中心に据えた、DVDの作成を試みている。これらの試みは、近年の世界的な潮流として、テキストだけではなく、映像や音声を含めた自然な「語り」を、記憶の素材として重視する、民俗学・人類学的アプローチの最先端を実験的に赤羽台団地に応用したものである。

一方で、このような既存のアーカイブ施設にかかわる研究と、赤羽台団地、高蔵寺ニュータウン、千葉の湾岸部の団地群における、既存アーカイブの分析やアンケート、インタビュー調査を通して、個人レベルでの生活記憶の蓄積と、集団レベルでの生活記憶の蓄積の仕方が、異なる方法で行われつつあることを理解し、集団レベルにおいては、中間集団の諸活動が、集団的記憶蓄積に大きくかかわっていることが分かった。個人レベルだと個人的記憶や個人で残している書類や写真などを媒介にして記憶が蓄積される一方で、集団レベルでは、お祭りや集団行事などが集団の記憶の蓄積と世代を超えた再生に寄与していることが分かった。

さらに、本研究においては、赤羽台団地における生活記憶のための社会実験を5年間にわたって実施してきたが、赤羽台団地の再開発の進捗に伴い、最初の2年間については、具体の店舗空間を利用した、実空間における記憶集積装置の実験的運用を行い、その中で、単なる記憶にかかわる品の展示ばかりでなく、居住者主催の写真展やワークショップを開催することや、展示空間に少しばかりの力

フェを設けて話し合いができる空間を提供することが、その場が多様な世代にわたる「居場所」の創出につながることを確認した。

さらに、3年目からは再開発の進捗に伴って、活動の場所を店舗空間という実空間から、新築の団地の集会所を借りてテンポラリーに、展示等を実施する時限型の記憶集積装置へと展開した。このように、アーカイブ施設が常設ではなくても、運用の仕方によって様々な、「多様な人の記憶をつなぐ出来事」を創出しうることが確認された。同時に、単に主解除だけを舞台にするのではなく、「団地ピクニック」や「団地宝物探し」のような「こと」を仕組むことによって、旧居住者から新居住者へ、団地が蓄積してきた記憶の一部が継承されうることが確認された。と同時に、この継承行為が、団地再開発で常に問題になる、新旧居住者のコミュニケーションを促進する可能性があることも示唆された。

さらに、2014年度からは、赤羽台プラスのホームページ機能やSNS機能を充実させ、ネット空間を利用したアーカイビング施設の運用実験も行ったが、このタイプの施設では、主として若い世代の参加が見られた。このことは、ネットを媒介とした新居住者への記憶の伝承の可能性を示唆していると思われる。

以上のような社会実験を踏まえ、今後、日本の各団地で、実空間を使ったり、ネット空間を使ったりする、生活記憶の蓄積装置が機能し得ることを実証した。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

##### [雑誌論文](計20件)

西川祐子、祐成保志、篠原聡子、住まいと教育と社会、建築雑誌4月号、査読無、1657号、2014、4-9

岩本通弥、“当たり前”と“生活疑問”と“日常”、査読無、1号、2015、3-16

篠原聡子、東京のマンションの展開と暮らし、査読無、1号、2015、50-59

大月敏雄、住まい方調査と“建築計画学”、日常と文化、査読無、1号、2015、84-88

西川祐子、おひとりさま建築の文化史 ワンルームマンションからシェアハウスへの転回、建築雑誌1月号、査読無、1666号、2015、26-27

西川祐子、ニュータウンの社会史、社会科学、査読有、第45巻第3号、2015、182-186

岩本通弥、民俗学における「普通の暮らし」 岩本通弥・前日本民俗学会長に聞く、建築雑誌、査読無、1670号、2015、10-15

鈴木雅之、集合住宅率70% 東京の普通の住まい、建築雑誌、査読無、1670号、2015、18-19

大月敏雄、角を矯めて牛を殺さない制度

運用、建築雑誌、査読無、1674号、2015、10-11

大月敏雄、いしまるあきこ、特集主旨：記憶のつなぎ方、建築雑誌、査読無、1675号、2015、2

大月敏雄、同潤会アパートに見る記憶継承の30年、建築雑誌、査読無、1675号、2015、10-11

大月敏雄、大橋寿美子、神吉優美、南後由和、宮原真美子、ひとりて暮らす・家族で暮らす・他人と暮らす・コミュニティで暮らす、建築雑誌、査読無、1677号、2015、9-14

有岡三恵、勝矢武之、佐藤淳、篠原聡子、寺田真理子、スクウォッター・セルフリノベーション・つながる場の創造・デッドストックの再活用・コモンスペースの挿入、建築雑誌、査読無、1677号、2015、15-20

篠原聡子、「生きるための家」に見るさまざまな逸脱のかたち、建築雑誌、査読無、1677号、2015、47

鈴木雅之、高齢団地のコミュニティ・ネットワークと場づくり、日本在宅ケア学会誌、査読無、第18巻第2号、2015、5-9

大月敏雄、朴ソンウォン、宇部炭田と常磐炭田の炭鉱住宅遺産、日本建築士会連合会『建築士』、査読無、第64巻第756号、2015、25-27

大月敏雄、縮退先進地としての炭鉱住宅に学ぶ、日本建築士会連合会『建築士』、査読無、第64巻第756号、2015、12-15

大月敏雄、郊外住宅地の成熟、日本都市計画家協会 PLANNER 都市計画家、第80号、2015、14-15

紺野光、申貞仁、サキャラタ、大月敏雄、西出和彦、賃貸集合住宅における多様な住戸内平面計画の住みこなし方と設計者の意図に関する研究 - 東雲キャナルコート CODAN1 街区調査を通して -、日本建築学会、査読有、住宅系研究報告会論文集、2015、161-168

申貞仁、深井祐紘、久寿米木真子、大月敏雄、西出和彦、居住者の住まい方からみる中廊下の評価に関する研究 - 建替え事業によって中廊下型が採用された郊外の集合住宅団地を調査対象として -、日本建築学会、査読有、住宅系研究報告会論文集、2015、169-178

##### [学会発表](計6件)

鈴木隆文、東秋沙、服部岑生、鈴木雅之、陶守奈津子他、集合住宅団地における外部空間の実態とその更新 - 千葉市ニュータウンでの団地外構整備計画の実践 -、日本建築学会建築計画委員会・建築社会システム委員会・都市計画委員会・農村計画委員会、住宅系研究報告会、2015年12月5日、建築会館(東京都港区)

鈴木雅之、上野武、石川永子、山岸輝樹、  
廃校小学校を活用した地(知)の拠点とし  
てのサテライトキャンパスの整備・運営、  
日本建築学会 2015 大会、2015 年 9 月 4  
日、東海大学(神奈川県平塚市)  
岩本通弥、“当たり前”と“生活疑問”と  
“日常”、日本民族学会 2014 国際シンポ  
ジウム、2014 年 10 月 4 日、成城大学(東  
京都世田谷区)  
篠原聡子、東京のマンションの展開と暮  
らし、日本民族学会 2014 国際シンポジ  
ウム、2014 年 10 月 4 日、成城大学(東  
京都世田谷区)  
大月敏雄、住まい方調査と“建築計画学”、  
日本民族学会 2014 国際シンポジウム、  
2014 年 10 月 4 日、成城大学(東京都世  
田谷区)  
Michiya Iwamoto, About the Folklore  
Society of Japan (FSJ) International  
Union of Anthropological and  
Ethnological Sciences Inter-Congress  
2014, 2014 年 5 月 18 日, Convention  
Hall A at Makuhari Messe, Chiba (千葉  
県千葉市)

〔図書〕(計 3 件)

岩本通弥 他、ミネルヴァ書房、知って役  
立つ民俗学 現代社会への 40 の扉、2015、  
308  
西川祐子他、昭和堂、京都発ニュータウ  
ンの「夢」建てなおします、2015、256  
山口幹幸、川崎直宏、鈴木雅之ほか、鹿  
島出版会、人口減少時代の住宅政策戦後  
70 年の論点から展望する、2015、  
262(102-126、216-225)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等  
<http://keikaku.arch.t.u-tokyo.ac.jp/aka>

[pla/site/index.html](http://pla/site/index.html)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

大月 敏雄 (OTSUKI, Toshio)  
東京大学・大学院工学系研究科・教授  
研究者番号：80282953

(2) 研究分担者

篠原 聡子 (SHINOHARA, Satoko)  
日本女子大学・家政学部・教授  
研究者番号：20307987

(3) 連携研究者

鈴木 雅之 (SUZUKI, Masayuki)  
千葉大学・運営基盤機構キャンパス整備企  
部門・准教授  
研究者番号：90334169

(4) 連携研究者

森 正美 (MORI, Masami)  
京都文教大学・総合社会学部・教授  
研究者番号：00298746

(5) 連携研究者

岩本 通弥 (IWAMOTO, Michiya)  
東京大学・大学院総合文化研究科・教授  
研究者番号：60192506

(6) 連携研究者

西川 祐子 (NISHIKAWA, Yuko)  
京都文教大学・地域協働研究教育センター・  
研究員  
研究者番号：50183538

(7) 連携研究者

服部 岑生 (HATTORI, Mineki)  
千葉大学・大学院工学研究科・名誉教授  
研究者番号：40009527